昭和（戦前・中）の女性文学

女性作家の四つのピーク

①1896-1897　　日清戦争後

②1906-1916　　日露戦争後

③1927-1929　　関東大震災後

④1938-1939　　日中戦争開戦後

＊文学場の再編時

＊女性作家の存在と認知にタイムラグも

中流階層女性読者

1920-1988

1905

1917-2008

1916

少女たちの読者共同体

吉屋信子『花物語』1916-1926

初夏のゆうべ。七人の美しい同じ年頃の少女がある邸の洋館の一室に集うて、なつかしい物語のふけりました。（「鈴蘭」冒頭）

③関東大震災後

- ささきふさ
- 尾崎翠
- 高群逸枝
- 若杉鳥子
- 林芙美子
- 平林たい子
- 上田文子
- 窪川（佐多）稲子
- 中本たか子
- 中条（宮本）百合子
- 松田解子

『コレクション・モダン都市文化 第48巻 恋愛』 ゆまに書房、2009

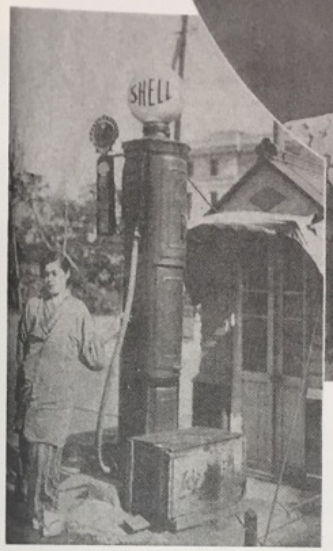
エアー・ガール

女車掌

職業婦人

ゴルフ・ガール

マリン・ガール



ガソリン・ガール

ダンサー

マニキュア・ガール

ステーション・ガール

電車ガール

『女人芸術』

『女人芸術』表紙
●第1巻…1928年7月-12月
●第2巻…1929年1月-12月
●第3巻…1930年1月-12月
●第4巻…1931年1月-12月
●第5巻…1932年1月-6月
●第1巻 1928年7月-12月
●第2巻 1929年1月-12月
●第3巻 1930年1月-12月

●第4巻 1931年1月-12月
●第5巻 1932年1月-6月

世界社、1927

世界社、1928

コロンタイ（1872-1952）は、ロシアの女性革命家、外交官。女性解放論も多く著した。革命に生きる女性の性の自由を書いた小説は、世界的に反響を呼んだ。日本でも、とくに「三代の恋」（『恋愛の道』所収）を中心にして議論が沸騰した。『女人芸術』にも「「恋愛の道」各人各語側聞記」（1-1）をはじめとして、話題となっている。また中島幸子訳『偉大な恋』は『女人芸術』第3巻第1号～3号に連載された。

③震災後

明治後期の活躍
↓さびれる
潮の満ちてくるやうな勢ひ
女流文壇の全体的傾＝左傾

文壇 昨日と今〔八〕

花なれば こそ 女群も 赤い

◇ これまでにいはゆる女流作家がもつとも活躍した時代は、明治後期即ち、現在の「女人藝術」の母胎長谷川時雨女史かはだにほやかな青春時代で、當時は小説に佐藤春夫即ち田村俊子あり、岡田八千代、大家柳絮あり、戯曲に長谷川時雨ありで、この勢ひで進めば大したものだと思はせたものだつたが、その後ばつたり火の消えたやうにさびれてしまつた、ところが近年またもや潮の満ちてくるやうな勢ひで、もう一度頭をもたげようとしてゐる

まづ今までにもつとも知れてゐるところでは野上彌生子、三宅やす子、中條百合子、吉屋信子、宇野千代、平林たい子、さゝき・ふさ諸君がをり、一段下つて中本たか子、松田解子、岡田禮子の諸君がゐる

野上彌生子は例の手がたい手法をもつていはゆる「町子もの」で左翼に轉向するプチ・ブル婦人の心境をヴイヴッドに描いてゐるし、三宅やす子は一種の虚無的自由主義とでもいふやうな態度、宇野千代はエロの方向へ逃避してゐる

更に平林たい子はいふまでもなくプロ派の中堅、近くロシアから歸つてくる中條百合子が「赤い」小説を書くであらうことは眼に見えてゐるし、中本たか子以下は皆全然赤い藝術派だ、吉屋信子一人連合小説を書いてゐる、といふ状態で、女流文壇の全體的傾向としては左に轉じつゝあると傾られる

◇ これは「女人藝術」が文壇に送りだした中本たか子、林芙美子、松田解子、戸田豐子迄に「戰旗」の窪川いね子「文戰」の山本利子モダーン派とでいふべき岡田禮子あたりの作品が雑誌ジャーナリズムの利用するところとなり——

渦中からはいはせれば少やけ気味ズムを利用して——意外に活躍

作家は相當多い、大谷藤子、大田洋子、後藤かつ子、川瀬美子、藤川洋子、高橋鈴子、に文壇に進出してきたゝめ、いはゆる女流大家連が方向を見失ひ、そこに女の「同性」が作用して大勢順應に傾いた結果と觀られてゐる、しかも「女人藝術」が通俗大衆小説家三上於菟吉君流のいひわけに、夫人長谷川時雨女史に贈る資金によつて經營されてゐるなどは皮肉だ

「女人藝術」の擁する新進女流歌人今井邦子、茅野雅子、若山喜志子、詩人宮尾須磨子の諸君が別にゐるが、いづれも、女流文壇の主流とはいへない、評論家として、押しも押されもしないのが山川菊栄、神近市子で、歌人今井邦子は歌會名士で生田花世は青白き夫春月が廢戸内海のもくづと消えた後は「勞働者のやうに骨組のガッシリした」幻想の戦人をしきりに「夢」みてゐる——といふことになると全體から見た女流文壇の「左翼傾向」はどうも定説らしい

——文壇においてはマルキシズム文學が強くあきらめた一九三〇年中期から、強く女流文壇が回れ左をはじめた、やはり女は男より一歩おくれてゐる——

葵いつ子、平林英子の面々いづれも筆が立つてしかもそろつてかなり尖鋭的だ

◇

（この項終り）

1930.11.5『朝日新聞』

文壇昨今〔八〕

◇　◇

これまでにいはゆる女流作家がもつとも活躍した時代は、明治後期即ち、現在の「女人藝術」の委員長長谷川時雨女史がはだにほやかな青春時代で、當時は小説に佐藤盛英即ち田村俊子あり、岡田八千代、大家桐緒あり、戯曲に長谷川時雨ありで、この勢ひで進めば大したものだと思はせたものだつたが、その後はつたり火の消えたやうにさびれてしまつた、ところが近年またもや潮の滿ちてくるやうな勢ひで、もう一度花をもたげ出してゐる

まづ今までにもつとも知れてゐるところでは野上彌生子、三宅やす子、中條百合子、吉屋信子、宇野千代、平林たい子、さゝき・ふさ諸君がをり、一段下つて中本たか子、松田解子、岡田禎子の諸君がゐる

野上彌生子は例の手がたい手法をもつていはゆる「町子もの」で左翼に轉向するプチ・ブル婦人の心境をヴイヴッドに描いてゐるし、三宅やす子は一種の虚無的自由主義とでもいふやうな態度、宇野千代はエロの方向へ逃避してゐる要に平林たい子はいふまでもなくプロ派の中堅、近くロシアから歸つてくる中條百合子が「赤い」小説を書くであらうことは眼に見えてゐるし、中本たか子以下は皆全然赤い藝術派だ、吉屋信子一人遊蕩小説を書いてゐる、といふ狀態で、女流文壇の全體的傾向としては左に轉じつゝあると觀られる

花な れ

女群も赤いそこばれ

◇ ◇

これは「女人藝術」が文壇に送りだした中本たか子、林芙美子、松田解子、戸田豐子並に「戰旗」の窪川いね子「文戰」の山本初子モダーン派とちいふべき岡田禎子あたりの作品が雜誌ジャーナリズムの利用するところとなり——

連中からいはせればジャーナリズムを利用して——意外に活躍に文壇に進出してきたゝめ、いはゆる女流大家連が方向を見失ひ、そこに女の同性が作用して大勢順應に傾いた結果と觀られてゐる、しかも「女人藝術」が通俗大衆小說家三上於菟吉君浮氣のいひわけに、夫人長谷川時雨女史に贈る資金によつて經營されてゐるなどは皮肉だ

「女人藝術」の擁する新進女流作家は相當多い、大谷藤子、大田洋子、後藤かつ子、川瀨美子、藍川洋子、高橋鈴子、葵いつ子、平林英子の面々いづれも筆が立つてしかもそろつてかなり尖鋭的だ

◇ ◇

歌人今井邦子、茅野雅子、若山喜志子、詩人深尾須磨子の諸君が別にゐるが、いづれも、女流文壇の主流とはいへない、評論家として、押しも押されもしないのが山川菊榮、神近市子で、歌人今井邦子は座談會名士で生田花世は青白き夫春月が瀬戸内海のもくづと消えた後は「勞働者のやうに骨組のガッシリした」幻想の戀人をしきりに「夢」みてゐる——といふことになると全體から見た女流文壇の「左傾向」はどうも定說らしい——文壇においてはマルキシズム文學がとくあきられた一九三〇年中期から、強く女流文壇が「回れ左」をはじめた、やはり女は男より一歩おくれてゐる——などといつたらしからるか

（この項終り）

④日中戦争
開戦後

◆…女流作家の進出が問題になつてゐる。事實、ジャーナリズムの上で、女流作家の仕事が、かなり華やかに眼につく。

◆…しかし、それなら女流作家の有力な新人が輩出したのかと言へば、さうではない。また、女流作家の手になつた問題作でも發表されたのかと言へば、さうでもない。女流作家たちに依つて、日本の文學の新しい發展を示すやうな、何が新提唱があつたのかと言へばこれもまた、そんなことはない。同じやうな顔ぶれの女流作家たちが、十年一日のごとく、同じやうな「質」の仕事を、コツ〳〵とつゞけてゐるだけである。

◆…それにもかゝはらず、女流作家の活動が華やかに見え、女流作家の進出が問題になるのは、どういふ理由だらう。

女流作家の進出

中村武羅夫

現實も混亂を極めてゐるかも知れないが、小説も混亂を極めてゐる。曾ての目的意識の文學とは、今は別樣な意味の目的意識の文學が氾濫して、斯る場合の特徴として、作品がその「藝術性」の點では、全く支離滅裂を極めてゐる。

◆…だが、女流作家の殆どすべては、多くの男性作家を壓倒し、引っ掻き廻してゐる現實の嵐には、全く風馬牛である。十年一日のごとく、只管文學の世界に沈潛し、小説を書くことに沒頭してゐる。岩が急に高く屹立したのではなく、大きく波の搖れてゐる谷間に、自然と岩が面を出しただけではないのか。

1939.6.24『朝日新聞』

文藝時評（1）

女性作家の進出

ひたむきな藝術至上主義

武田麟太郎

女性作家の旺盛な製作欲が眼立つてゐる。これは、昨年前半期の終り頃から指摘出來た傾向で、彼女たちがひたむきに藝術至上主義の精神に燃え立つてゐるさまは見事で、それ自身、殊にこの時、十分に意義を有してゐる。

そこで彼らの撲策と焦躁もまた意義深いものになつて來るのだが、女性作家たちの生々しい現實に下手に現はされてゐないための怪我の功名が、現在の活潑な様相だとすれば、彼女たちの小説の評價はどう云ふことになるか。

肝腎なのは、このことが、同時に日本に於ける女性の狀態の低さを物語つてゐると云ふ事實。あるひは、彼女たちの振興は彼女たち

1939.6.29『朝日新聞』

④日中戦争
開戦後

芸術派／素材派

女流作家の進出

中村武羅夫

◆…女流作家の進出が問題になつてゐる。事實、ジャーナリズムの上で、女流作家の仕事が、かなり華やかに眼につく。

◆…しかし、それなら女流作家の有力な新人が輩出したのかと言へば、さうではない。また、女流作家の手になつた問題作でも發表されたのかと言へば、さうでもない。女流作家たちに依つて、日本の文學の新しい發展を示すやうな、何が新提唱があつたのかと言へばこれもまた、そんなことはない。同じやうなぶれの女流作家たちが、十年一日のごとく、同じやうな「質」の仕事を、コツ〳〵とつゞけてゐるだけである。

◆…それにもかゝはらず、女流作家の活動が華やかに見え、女流作家の進出が問題になるのは、どういふ理由だらう。

現實も混亂を極めてゐるかも知れないが、小說も混亂を極めてゐる。曾ての目的意識の文學とは、今は別樣な意味の目的意識の文學が氾濫して、斯る場合の特徴として、作品がその「藝術」で

◆…

新人ではない
十年一日
只管文学の世界に沈殿、没頭

1939.6.24『朝日新聞』

文藝時評（1）

女性作家の進出

ひたむきな藝術至上主義

武田麟太郎

女性作家の旺盛な製作欲が眼立つてゐる。これは、昨年前半期の終り頃から指摘出來た傾向で、彼女たちがひたむきに藝術至上主義の精神に燃え立つてゐるさまは見事で、それ自身、殊にこの時、十分に意義を有してゐる。

そこで彼らの摸索と焦躁もまた意義深いものになつて來るのだが、女性作家たちの生々しい現實に下手に現はされてゐないための怪我の功名が、現在の活潑な様相だとすれば、彼女たちの小說の評價はどう云ふことになるか。

肝腎なのは、このことが、同時に日本に於ける女性の狀態の低さを物語つてゐると云ふ事實。あるひは、彼女たちの振興は彼女たち

1939.6.29『朝日新聞』

文学場における「女性作家」

a. 市場の論理＝再編時の〈充填〉

b. 「文学」の価値＝〈補強〉

②自然主義／家庭小説

③プロレタリア文学／ブルジョア文学

④芸術派／素材派

c. 「女性らしさ」との交渉

d. 「批評」のジェンダー

c.「女性らしさ」との交渉①

雑報「女性詩人」『帝国文学』9、1895.9

- 近年、小金井喜美子、花圃女史、若松賤子、一葉女史、薄氷女史等多少の女性詩人を輩出して、稍巾幗者流の為に気焔を吐くに似たり。然れども、余輩の信ずるところを有体に言はしべば、最も厳密なる意義に謂ふ詩人なるものには女性は決して適当なるものにあらず。

雑報「小説家としての女性」『帝国文学』2-2、1896.2

- 小説家としての女性のヤゝ成功したる蹟あるは何の故ぞ。他なし、単にハアトの事、是れ畢竟女史の整理し得らるべき適当のものなれば也。

＊女性作家＝〈女性らしさ＝ハアトの事〉 ゆえに否定

c.「女性らしさ」との交渉②

片山孤村「女性と芸術」『最近独文学の研究』1909

少なくとも芸術に於ては女子が男子を凌駕する事が出来ると云ふ俗説の成立たぬ事は明白で有るだらうと思ふ。……此等の婦人は世の普通の婦人で無くて、彼等よりも多量な男性的部分を有した女性である。其男子的事業を成し得たのも、怪しむべき事では無い。

青柳有美「女流文学者」『世界の新しいふらんす女』1913

体力労働が女の健康や気分を害するやうに、文筆労働も又著しく女の性情を害するものらしく、文筆に親しむ女に限り、女らしき処が無く、全然男性化してしまつてるのが常だ。巴里の女流文学者を日本に伴れて来たら、青鞜同人等と同様、吉原へ女郎買にでも出かけさうな連中ばかりだ。

＊女流文学者＝女性らしくない＝男性化

c.「女性らしさ」との交渉③

広津和郎、最近の女流作家（三）、朝日新聞1929.3.29

- 虐げられたものの真剣さが、無産階級のぼつ興を促しつつあると同様に、今まで男子によつて虐げられてゐた婦人達の真剣さが、婦人の進出を、ほんたうに開始させたのだといつていゝと思ふ。／この文でこゝ十年も経つたならきつと創作ばかりでなく、他のあらゆる方面において、男性に型を並べるやうな婦人達が、続々として現れてくると思ふ。――益日光を女性の上に興へよ。

無署名、文壇昨今 女群も赤い、朝日新聞1930.11.05

- 一九三〇年中期から、漸く女流文壇が回れ左をはじめた、やはり女は男より一歩おくれてゐるなどといつたらしかられるか。

＊女性文学者：女性という「階級」

c.「女性らしさ」との交渉④

窪川鶴次郎「女流作家論」『日本読書新聞』1939

- 婦人作家の活動が目立つて来たといふことゝ、婦人作家の活動そのものが旺盛になつて来てゐるといふことは、その間に多少意味の相違がある。そして今日婦人作家が問題にされるやうになつた事情は、婦人作家の活動そのものが旺盛になつて来たためよりも、むしろその活動が衆目を惹くやうになつたからではなからうか。

武田麟太郎、『特異なる風格、朝日新聞、1939.6.30

- 一言にして云へば、小説が圧倒的な現実に負けて、作家的な余裕を持ち得なくなつて来たからであらうが、結果の一つとして、巧みとか味のない素人臭い作家が支配的になつて来ていることなぞ、見逃せない。（略）この間にあつて、女性作家は小説の内なる香気に固執してゐる。しかも、文学の流行とは妥協しないで、各自の個性を基底として譲らないこと、何か女心の狭隘ささへ感じさせる。

＊女性＝従来の文学的価値・芸術派←→文学の新状況・素材派

d. 批評とジェンダー

平林たい子「婦人作家よ、娼婦よ」『文芸戦線』1925.9

- 「女である、女にしては……」この二つの相言葉によつて、男性中心の、ブルジヨア文壇は、彼女たちを、娼婦を迎える如く、双手をあげて歓迎した。……女性等よ、目覚めよ、彼女等を追放せよ。／新しい時代は、「人間」としての我等女性を要求しているのだ。

神近市子、印象に残つた女流作家・作品（一）、1932.12.13

- 特に婦人作家のものをとりあげたのは、男の作家にはそれ／＼友達とか先輩とかあつて批評がしてもらへるのに、女の作家達には、なか／＼さうした機会がない。

＊③期＝女性批評家輩出　批評のジェンダー性が指摘

「女流作家」の出現を可能にするもの

a. 師弟制度→懸賞／文学賞受賞

②田村俊子『あきらめ』朝日新聞

④中里恒子『乗合馬車』芥川賞

b. 雑誌という媒体

②『女子文壇』『青鞜』

③『女人芸術』

c. 質の変化：周縁へ拡大

①閨秀

②地方

③階級

④既存作家の再評価

戦時と女性文学

林芙美子、1938.12

林芙美子、1939.1

吉屋信子、1937.11

婦人公論
特輯・戦時下の女性道徳
三月號

決戦下の結婚教育號
主婦之友
五月號
昭南島從軍記 石川達三
大東亞戰爭野戰病院記 大嶽康子

まとめ

文学場における女性作家

- マイノリティとしての配置

  Cf. セジウィック：アイデンティティの普遍化／マイノリティ化

- 配置の論理の歴史性・複数性
- 女性作家の場所の獲得・拡大の過程

- 戦後 「女流作家」→「女性作家」